哲學研究　第二十一號

十九世紀後半に於ける倫理學說の發達

中島力造

本日余のこゝに述べんとする題目は、『十九世紀後半に於ける倫理學說の發達』といふ極めて大なる問題である。何故に此問題が、それ程大なる問題なるか、といふに倫理學も他の精神科學、社會科學と同樣に、十九世紀後半に於て、非常なる發達を遂げたのであるが、その發達の主要なる原因は、直接には、倫理學の基礎科學たる、心理學、社會學が、大なる發達をなしたる事、間接には、自然科學、物理科學の發達及び、それの應用の普及の結果、倫理學說にも種々なる影響を與へた、といふ事である。今此等の關係事情に亘りて、根本的に說述することは、此の短時間に於ては、到底不可能である。それ故に、こゝには、唯だ倫理學說そのものゝ上に現はれたる變動につきてのみ述ぶるに止めやうと思ふ。而て、この倫理學說上に現はれたる變動も、非常に種々なる方面に亘つて居り、從つてこれをば、抽象的に問題々々に就きて述ぶるは、餘りに抽象に失

して、了解を妨ぐることゝ思ふ故、なるべく具體的に、十九世紀後半に於ける主要なる學者をば順次に擧げて、それの著作と思想との概要を述べ、最後に、之を綜合して、大體如何なる倫理學說が、十九世紀後半に現はれたるか、その特色及びそれの影響は如何、といふことをば述べて見たいと思ふ。

今先づ如何なる學者が、十九世紀後半に於ける、英佛獨の三國に於て現はれたるか、と言ふに、第一に、英國にては、大體これを、三つの學派に分ちて考ふることが出來る。即ち一は、英國在來の經驗派で、これは、ミル、シヂュヰック、スペンサー、スティーブン、バックスレー等によりて代表せられ、次は、この經驗派の反動として生れたる新カント派で、かのブラッドレー、グリーン、ケァード兄弟、ワレース等はこれに屬する。(但しケァード、ワレースは主として宗教哲學や、認識論を論じ、倫理に關しては餘り述べて居らず、)第三は、英國經驗學風の不充分を認め、幾分獨逸思想によりてこれを補はんとするも、然しかの新カント派の如く極端ならず、卽ち獨逸思想をば、どこまでも英國在來の研究法に依て考察せんとするものである。かの蘇蘭のローリー英蘭のマルチノ、サミュエル・アレキサンダー、等は、これが代表者である。次に佛國に於て、倫理學上に影響を及ぼしたる、主要なる學者は、ジャネー、ルヌビエ、フイエ、ギュヨー、及びコムト派の學者の或者である。

就中、ジャネーは、佛國折衷派の代表者で、ルヌビエは、佛國新カント派の主要學者、フィーエ、ギュヨー、は溫和的態度をとりて、佛と獨との間を行かんとしたるものである。最後に、獨逸に於ては、かのハルトマン、ヴント、ギッチキ、パウルゼン、ジムメル等を、十九世記後半に於ける倫理學上主要なる學者として擧げることが出來る。

今飜つて、以上英佛獨三國に現はれたる倫理學者を通觀するに、こゝに先づ注意せらるゝのは、その中に於て、英國の學者が、大多數を占めて居る、といふことである。而てこは啻だに、十九世紀後半に於てのみならず、十八世紀に於ても、十九世紀前半に於ても、二十世紀に於ても亦然るのである。こは果して如何なる理由によるのであらうか。思ふにこは、全く、倫理學そのものゝ性質上、此くの如き結果になつたのであらう。元來倫理學をば、科學として研究するは、英國にはじまる。卽ち英國人の或者は、Ethics is a British science と言つて居るが、これは正當である。勿論他の國に於ても、決して倫理學をば研究しなかつた、と云ふのではない。然し獨佛等にては、倫理學をば、主として、哲學の一部として研究し、而してこれをば獨立の學として研究するに至つたのは、近來のことに屬する。從て獨立の科學としての倫理學の研究者が、佛獨に少くして、英に多數を占むるといふことは、自然の結果である、と云はなければならぬ。

以下順次、第十九世紀下半に於ける、英佛獨の倫理學說、及びその發展の概要をば、辿つて見やうと思ふ。

第一　英國に於ける倫理學說の發達

(1) ジョン、スチュアルト・ミル(J. S. Mill, 1806-1873).

第一に述べなければならぬのは、このジョン・スチュアルト・ミル、である。彼れは極めて博學の人で、その倫理學上の主著、Utilitarianism (1861) の外に、有名なる、Logic がある。その他經濟學、政治學に關する著書もある。彼れがその Utilitarianism をば公にするに至つた目的は、主として、かのベンザムの功利說をば修正發展し、而して、これにより て功利說に對する直覺派の攻擊に答ふるといふことであつた。元來、ベンザムは、法理學者で、哲學上の知識には餘り深からず、從て其倫理學上の原理となせる、最大多數の最大幸福、(The greatest happiness of the greatest number.) といふ概念も、その根據が、充分徹底的に明らかになつて居なかつた。卽ち第一には、その心理學的基礎が確立して居ない。彼れは、凡て人類は快苦に依て動かされ居る處の利己的生物である、と說くと共に、他方に於て、最大多數の最大幸福を圖れ、といふ、利他說をば主張して居る、ので

あるが、如何にして、この利己的のものが、かく利他的の行爲をば爲し得るか、又爲さざる可からざるか、といふ點に關しては、充分の說明を與へて居なかつた。而して此の心理學上の欠陷をば、かの聯想派の心理說によりて補はんとせるが、かのゼームス・ミル、(James Mill, 1773–1836)であり、而て更らに、その立場を徹底して、凡ての道德的事象及びその發達をば、觀念聯合といふ概念によりて說明し、又ベンザムの量的快樂說をば改造して、質的快樂說となし、これに對して一層確實なる心理的基礎を與ふると共に、又これによりて、當時倫理學上の主要問題たりし、善惡の標準、といふことに關する直覺派と功利派との論爭、殊に直覺派の主將ヒューエルの功利說に對する攻擊に對して答へんとしたるが、卽ち、このゼームス・ミルの子なるジョン・スチューアルト・ミル、であつたのである。然し翻つて考ふるに、彼れの功利說は、それにもかゝはらず、幾多の矛盾を含むで居ると共に、又そは種々なる點に於て、直覺說に讓步して居る、と言はなければならぬ。卽、第一に彼れが、快樂に量の差のみならず、質の差をも許したることは、或る意味に於て、已に快樂說を去りて、直覺說に近づきたるもの、と見ることが出來るし、又彼れが公正(Justice)の觀念を認め、これに對して、心理的說明を與へんと企てたることも、たしかに直覺派に對する一讓步と言はなければならぬ。然しかく彼れが直覺

派に對して讓歩しおるにもかゝはらず、彼れ一派の功利說に對する直覺派よりの攻擊は毫も止まなかつた。而して、こゝに、更らに一層直覺派に讓歩することによりて、功利說と直覺說との調和をはからむとしたるものは卽かのシヂュキック であつたのである。

(2) シヂュキック (Sidgwick, 1838–1890)

彼は英國ケンブリッヂ大學の敎授で、その倫理學上の主著は、卽かの Methods of Ethics (1874) である。其の他經濟學、政治學、哲學等に關する著書もある。彼れの此の倫理學書は、かのグリーンの Prolegomena to Ethics と共に、十九世紀に於て世に現はれし倫理學書中最も大なる影響を世に與へたものと稱せられる。而てこは『倫理學說批判』として我國にも飜譯せられて居る。

彼れの倫理說は、前述の如く、かのベンザム、ミル等の功利說の經驗論をば一層修正することによりて、功利說と直覺說との調和を圖らむとしたるものである。卽ち彼れによれば、道德上の或觀念は、生得的に吾人に具有せらるゝので、決して、かの聯想派の主張する如く經驗のみよりして來りしものではない。例へば、かの公正 (Justice) 仁愛 (Benevolence) の原理の如きは、これである。而して、これやがて、彼れの立脚地が、合理

的功利說(rational utilitarianism)又は、直覺的功利說(intuitive utilitarianism)と稱せらるゝ所以である。然し彼れがかく道德の直覺的要素を認めて、功利說をば餘程合理的のものとなし、或る點まで、直覺說と功利說との調和を全うし得るにかゝはらず、彼れの倫理學說に對しては、種々なる方面よりして反對が起つて來た。而て今その理由の主なるものを考へて見るに、第一には彼れが、かの進化論と倫理學との關係をば餘りに輕視し過ぎたと云ふと、卽ち彼れは、良心の起源及び其發達といふことに關して進化論の與ふる說明は、倫理學說そのものに對して、左迄大なる影響を與ふるものに非ず、となして、殆どこれをば顧みなかつたことである。第二には、彼れは又、一生社會學をば嚴密なる獨立科學として認めず、從つて之れと倫理學との關係をば、餘り重要視しなかつたといふことである。而てこは、此の新興科學に對する當時一般學界の關心に反する態度であつたのである。第三には、彼れは政治上にては全く英國在來の古風なる個人主義をとり、一生これをば棄てなかつたと云ふことである。而てこれも亦彼れが一般學界の反對を招いた一つの理由である。此くの如く彼れの倫理說の弱點は、主として、彼れの、進化論及び社會學の輕視と、彼れの個人主義といふことにあつたのであるが、然しこの進化論や社會學は、次第に一般學界に認容せられ、これと

共に、倫理學上の問題そのものも次第に變つて來た。即ち前にも述べたる如く從來倫理學上の主要問題は多く善惡の標準といふことで、而てシヂュキックの如きも主としてこれが批判を試みたのであるが、かの進化論の普及につれて、良心の起源といふことがその中心問題の一となつて來た。即ち吾人の善惡を判別する良心は、果して、生得的なるか、又は經驗的なるか、といふ問題これである。而てかの直覺派は、これをば、生得的なり、とするに反し、功利派は、その聯想學派の立脚地よりして、これをば經驗的なりとして、その間の論爭が次第に烈しくなつた。此の問題に對し、かのシヂュキックとは反對に、どこまでも進化の立場よりして、これに、解決をば與へんとしたるものは即ちスペンサーである。

(3)スペンサー、(Spencer,1820—1903.)

彼は倫理學をば、宗教、形而上學等より離れ、主として、生物學・社會學の基礎の上に、獨立なる學として打建てんとした。而して彼れの所謂綜合哲學(Synthetic philiosophy)の最終の目的は、實にこの科學としての倫理學の建設といふことにあつたのである。即ち彼れの倫理學原理(Principle of Ethics,1879-1893)は、その綜合哲學の第五部即ち最終編として世に出でゝ居る。而してこれの一部分を爲せる、Data of Ethics(1879)及びJustice

(1891)は、彼が健康を害して、到底その倫理學原理の完成を全うすることを得ざる可きを思ひ、病苦その他種々なる生活上の困難と戰ひながら、匆忙の間に書き上げたる彼れの心血の結晶である。吾人、一度彼れの自敍傳を讀みて當時の彼れの境遇をば想見する時、如何にしても彼れの倫理學說に對して、冷やかなる徹底的の批判をば、加ふるに忍びなくなるのである。

前きにも述べたる如く彼れの倫理學の目的は、進化論の立脚地よりして、かの直覺說と功利說とをば綜合調和すると云ふことであつた。先づ良心起源の問題に關しては、彼れは從來の聯想說の立場を棄てゝ道德の先天的要素をば認めた。而て此の點に於て彼れは、かの直覺說と握手して居る。然しながら、此の先天的要素は、彼れにありては、決して絕對的のものに非ずしてこは種族の經驗をば集積せる結果として生じたるものである。それ故にこれを個人より見れば、こは先天的なるも、これを種族より見れば、後天的と言はなければならぬ。卽ち此の點に於て、彼はどこまでも、功利派の經驗說をば維持して居る、と云はなければならぬ。次に彼は、ベンザム以來、吾人の行爲は、凡て快不快の感情によりて支配せらる、といふ快樂論的心理說 (hedonistic psychology) をば改造して、人間の行爲の目的は決して單なる快樂の追求といふ如き

ことではない。こはどこまでも、生命そのものゝ幅と長さとを增進し自己及び種族の保存進化に資する、といふことでなければならぬ。かの快樂の如きは、この生命の擴張發展の結果として、自然に得らるべきである、と說いて居る。而して此の點に於て、彼れは又功利說をば出でゝ直覺說に近かんとして居る、といひ得るのである。然し彼れは、政治學上に於ては、かのシヂュ、キックと等しく、英國在來の個人主義の立場を去らなかつた。而して佛國よりして、新たに、かのコムトの學が入り來るに及び、彼れの主張に對しては又種々なる方面よりして反對說が起つて來た。今その中にあつて、特に彼れの研究法及をの個人主義に反對して現はれたるものは、かの、スティーブン、である。

(4)スティーブン、(Stephen,1832-1904.)

彼の倫理學上の著書を、Science of Ethics (1882) と云ふ。彼がスペンサーの說に反對し、これをば改善せんとしたる第一の點は、卽ちスペンサーの研究法に關してであつた。彼れによれば、スペンサーの研究法は、決して科學的研究法又は歸納的研究法にあらずして、全く哲學的研究法又は演繹的研究法である。何となれば、彼れは、その進化論上の原理によりて、凡ての道德的事象及其の發達をば說明せんとするからであ

る。元來、道德上の事實なるものは、全く哲學上の原理をはなれて確實なるものである。如何なる立脚地の哲學說をとるも、これが爲めに、人間の當さに爲すべき道德そのものは、容易に變動するものではない。卽ちこは哲學說に基かざれば、その確實性を有しない、と云ふが如きものではない。然るに、スペンサーは、その進化論上の原理をば根據として、哲學的に中心より外部に進み行く方法をとつたのであるが、こは決して正當ではない。道德の研究は如何にしても、外部の道德的事實そのものより出發して、次第に中心に向ふの途をとらなければならぬ。次に又スペンサーは、餘程人間の社會的生活といふことに着眼したけれども、然し彼れの中心觀念は、どこまでも個人主義の立脚地にあつたのである。然し、個人と社會とは、決して單なる外部的關係に立てるものにあらずして、こは全く內面的の有機的關係を有するものである。卽ち個人は社會といふ一機關の tissue なりと云はなければならぬ。從つて社會の爲めに個人の善を犧牲に供するの非理なるを力說せるスペンサーの個人主義は正當でない、と云はなければならぬ。然るに、このスティーブンの修正說をも、なほ不充分なりとし、倫理學と進化論との直接的結合をば全く不可となし、倫理學をば進化論より分離することによりて、スペンサー、及びスティーブンの說をば改善せんとせしもの

は、卽ちかのハックスレーである。

(5) ハックスレー(Huxley,1825-1895.)

彼は千八百九十四年の Romanes Lecture に於て、進化論に就きて論じ、而てその結論に於て、進化論と倫理學との關係に關して次の如くに述べて居る。卽ち進化論に基きては、決して倫理學は成立しない。何となれば、自然界に於ては、かの優勝劣敗といふ進化論上の原理が行はれて居るが、道德界に於ては、却つて之と反對に、同情同感といふことによりて道德は全うせらるるのである。從つて倫理學は直接には進化論の基礎の上に立つことは出來ぬ、と云はなければならぬ。かくて彼れ以後、一般に進化論の立脚地よりして、倫理を論ずるものは、非常に少くなり、從つて英國の進化論的倫理學は、殆ど行詰りの姿となつたのである。それ故に、吾人は、今ここに暫く眼を轉じて、かの功利派の經驗的學風に反抗し、獨逸哲學をば、とり入るることによりて、その短處を補はんとせる、英國新カント派の倫理學說につきて概觀しやうと思ふのである。

前にも述べたる如く、英國にては、第十九世紀の初頃よりして、英國在來の經驗的學

風に、不滿足を感じ、獨逸思想によりて、これを補はんとする學者が次第に現はれて來た。例へば、文學者の方面にありては、かのカーライルの如きは、主としてフィヒテの思想をとり入れて、功利說に反對し、又コルリッヂはカント、ヤコビの思想の熱心なる輸入者であり、又哲學者の側にありては、かのハミルトンの如きは、カント哲學を研究し、これによりて蘇國の常識哲學をば、改造せんと努めたのである。而て倫理學說上に獨逸思想、殊にカントの思想をばとり入れたる學者の一人として吾人は先づかのブラッドレーをば擧げなければならぬ。

(6)ブラッドレー(Bradley,1846-)

彼れの倫理學上の著書には、Sthical Studies (1876) がある。彼れは後に至りて、次第にその思想に變化を生じ、その後に出でたる Appearance and Reality (1893) に於ては、それが著るしく窺はれる。然し兎に角彼れのこの Ethical Studies は、獨逸思想に基づきて道德哲學をば建設せんとせるもので、而て同時に又これが、獨逸學說の英國の大學以外に廣まる端緒となつた、と云ふことは、注意を要することである。而して英國の大學に於て、獨逸學說、殊にカント、ヘーゲル、の思想をば、とり入れて、英國固有の哲學と結合し、これをば非常に深奧のものたらしめるものは卽ちグリーンである。

(7) グリーン (Green, 1836-1882)

彼れの著書の最も主要なるのは、かのヒュームの全集の序文と Prologomena to Ethics (1883.) とである。彼れは十九世紀後半に於て英國の學界に對して、最も深大なる人格的感化を與へたる學者の一人である。即ち今日英國に於て、彼れの學風を繼承せる多くの人々は、凡て直接間接に、彼れの人格的感化を受けて起つた人々である。かのミュアヘッド、マッケンヂー等の如き皆然りである。グリーンの學說は前にも述べたる如く、主としてカント、フィヒテ、ヘーゲルの基礎の上に立つたものである。從つて彼れの學說は、假令此等獨逸哲學者の思想の直輸入にあらずして、充分これをば、英國思想に同化し、而してそれの上に自家の見地をば拓きしものなりとは云へ、然し大體上より言へば、彼れの學風は、どこまでも獨逸學風であると言はなければならぬ。即ちかの Prolegomena の如きも、先づ最初に認識論を說き、次に其原理に基きて形而上學の問題を論じて、心靈的一元論に到達し、更らにその基礎の上に、意志の自由道德の本質及その發展をば論じたものである。それ故に彼れの倫理學即ち自我實現說は、どこまでも哲學的倫理學である。勿論彼れは、或部分に於ては、功利說をも認めて、これをば自己の學說中にとり入れんとせし處もあり、又彼れは、實生活に對しても、多大の興味を

ば有し、教育、政治等のことに關しても、餘程力を盡して居るのであるが、然し要するに、彼れの倫理說が、哲學的であつて科學的でない、といふ缺陷を有する、といふことは事實である。而して、この缺陷をば補ひ、どこまでも、英國在來の經驗的、心理學的立脚地に立ちて、自我實現說をば建設せんとしたるものの一人は、卽ちかのローリーである。

(8) ローリー (Laurie, 1829–1909)

彼はその著 Ethics (1885) に於て、グリーンと同じく、自我實現說を說いて居るが、然しこれをばグリーンの如く、哲學的に論ぜずして、蘇國學風に基づき、幾分心理的に論ぜんとして居る。卽ち彼れによれば、人間の本性には、感情と理性との二要素がある。而して此の理性が、感情をばよく征服し、統御し行くことに於て、自我實現は全うせらるるのである。而てこの彼れの思想と殆ど同樣なる立場に立ち、而かも一層よく獨逸學風と、英國學風との調和をはかり得たるものはかの、ゼームス・マルチノである。

(9) マルチノ (Martineau, 1805–1900.)

彼れの倫理學上の主著は、卽ち、Types of Ethical Theory, (1889) である。彼れは元と、ミルの學說をば信ぜし人て、ミルとは、少時より非常に親密なる關係があつたのである。然るに一度伯林に遊學して、かのトレンデンベルヒ、につきて學びし結果、聯想派の學

説をば不充分として、これをば棄て主として獨逸哲學に基きて、自己の倫理學をば打建てんとするに至つたのである。卽ち彼れは、動機に關しては、直覺説をとり、吾人の行爲の動機には、種々ありて、各その價値をば異にして居る。而て吾人には、よく此等の動機の道德的價値をば直覺する能力が存在する。而てこれ卽ち彼れの動機直覺説であつて、彼れは、これによりて、よく功利派の經驗説の短所を補ひ、これと直覺説との調和をはかり得る、と考へたのである。最後に述ぶべきはかのサミュエル、アレキサンダーである。

(10) アレキサンダー(Alexander,1859-.)

彼れには Moral Order and Progress (1890) なる著書がある。而て彼は此書に於て、主として、スペンサーの進化論とグリーン一派の獨逸風の直覺説とを結合調和せんと試みて居るのである。然し彼れは、その後に於て、主として形而上學的問題の研究に沒頭し、倫理學につきては餘り論じておらない。而て彼れは今日、かの新實在論(new realism)に對して、多大の興味を有する一人なりと自ら稱して居る。

以上、吾人は、かのミルが、ベンザムの功利説をは、繼承發展せし以來、これが英國倫理

學界に於て、如何なる發達をなし、又如何なる變動を引起せしか、而して又英國新カント派は、如何にして起り、且つ如何なる方向に如何なる發達をなせしか、といふことにつきて、その概要をば辿つて來たと思ふ。それ故に吾人は、今更らに進みて佛國に於ける第十九世紀後半の倫理學說の發達につきて概觀して見たい、と思ふのである。

第二　佛國に於ける倫理學說の發達

一般に知らるる如く、佛國にては、近世の初め、かのデカルトの如き哲學者が出でて、一時哲學的研究が盛であつたが、第十八世紀に至り、英國の思想、殊にロック、ニュートン、等の思想が入り來るに及びて、唯物論的思想が、次第に盛となり、終には極端なる唯物論、感覺論が、一世の學界を支配するやうになつた。然るに第十九世紀の初めに至りて、此の唯物論的學風に對して反動が起り、種々なる反對說、種々なる折衷說が盛に起つて來た。而して此等の中に於て最も主要なる學者として先づ擧ぐべきは、かの折衷派の主將たる、クザン、及び彼れの繼承者たるジャネーである。

(1) クザン(Cousin, 1792-1867)及びジャネー(Janet. 1823-1899.)

クザンは主として、かの、マーン・ド・ビランの思想をば繼承し、これと、リード に始まる

蘇國の常識哲學と、獨逸哲學、殊に、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、等の思想とを折衷し、心理學に基きて、その哲學及倫理學をば建設せんとしたものである。彼れによれば、古來の學說は、その如何なるものに於ても、何か一つの點に於て、必ず心理上の基礎を有して居る。從つて心理學、及び哲學史は、必ず凡ての哲學の基礎とならなければならぬ。而てこの彼れの折衷說をば繼承發展し、倫理學上に於て、カントの形式說と、英國の功利說とをば調和し、一種の完全說を說いたものは、かの、ジャネーである。彼れによれば人間の目的は、人性の完全といふことであり、人性の完全は人間の活動力をば、出來得るだけ、充分に發展せしむることによりて全うせられる。而して此等の折衷說は、以後永く、佛國の官學として採用せらるることとなつた。思ふに、こは、從來佛國には、種々雜多なる信仰ありて政府はその統一に苦めるより、比較的尤もよく一般に認められ易きかの折衷說をとり、之によりて、此等種々なる思想、信仰をば統一せんとしたるによるのであらう。然るに、この折衷說は、又二方面よりして、大なる反對を受けた。卽ちその一は、カント學派よりの反對で、他はコムト學派よりの攻擊である。而して前者の代表者はかのルヌビエである。

(2) ルヌビエ(Renouvier, 1818–1903)

彼れの倫理學上の主要なる著書は、Science de la Morale.(1869)である。彼は自ら新カント派と稱し、一方ジャネーの折衷說に反對すると同時に、他方コムトの實證論にも反對した。而て認識論上にては、カントの物自體の概念をば排斥し、倫理學上にては、人格主義をとり、又自由意志をば主張した。次に又かのジャネーの思想中に存する個人主義的傾向に反對して起りしものは、卽ちコムトである。

(3)コムト(Comte,1798-1857)

彼は初め倫理學をば、餘り重要視しなかつたが、然しその晚年に至りては、非常にこれをば重視し、倫理學をは、萬學中に於ける最終の學なり、となすに至つた。卽ち彼れは晚年に於て、博愛を以て倫理上の根本主義となし、而て、人類全體の幸福及び進步をば目的とする、この倫理說をば移して、一種の實證的宗敎卽ち彼の所謂人類敎なるものをば立つるに至つたのである。此派に屬する多くの學者は佛國の折衷派に强く反對したのである、彼に次で、注意すべきは、かのフーイエーである。

(4)フーイエー(Fouillée, 1878-1912.)

彼れの倫理學上の著書をば『自由論と決定論』(La liberté et la determinisme, 1870)と云ふ。彼れは、觀念力、(Idées-forces)といふ概念をとり來りて心理學、哲學、倫理學をば說い

た學者である。彼は右の書に於て、古來唱道し來られしが如き、絶對的自由と云ふ如きことは、勿論不可であるが、然し、或る意味に於て自由といふことは、必ずこれを認容しなければならぬと說いて居る。而て又その『現代倫理體系の批評』(Critique des Systèmes de morale contemporains,1883) に於ては、主として、スペンサーの倫理說をば批評して居る。次に述べなければならぬのは、かのギュヨーである。

(5) ギュヨー(Guyau,1854-1883.)

ギュヨーは更らに一歩をすゝめて、餘程スペンサーの立脚地に接近し、生命の擴張といふことを以て倫理上の原則と爲さんとした。卽ち道德の原理は、人間の生命をば、intensive にも、擴充發展するといふことでなければならぬと主張するのが、彼れの學說の要旨である。

以上は、第十九世紀下半に於ける佛國倫理學說の發達の概觀である。吾人は最後に、更らに此の期間に於ける獨逸の倫理思潮の趨勢をば瞥見したいと思ふ。

第三　獨逸に於ける倫理學說の發達

前にも述べたる如く、從來獨逸に於ては、倫理學は主として哲學の一部として論ぜ

られ、獨立の科學としての倫理學は殆ど現はれて居ない。然るに第十九世に及びて、英國の影響を受けて次第に倫理學をば獨立の學として取扱はんとする傾向が現はれて來た。而して此の倫理學の科學的研究といふ傾向は幾分かのハルトマンに於て見出すことが出來ると思ふ。

(1) ハルトマン(Hartmann, 1842-1906.)

彼れの倫理學說は、主としてその著、Grundriss der ethischen Prinzipienlehre, に於て、窺ふことが出來る。此の書は、大體に於て二部に分かれて居る。即ち第一は、似而非道德的意識(das Pseudo-moralische Bewusstsein)の論で、これに於ては、主として、利己的似而非道德即ち個人的幸福說と、他律的似而非道德即權力說とが批評せられて居る。第二は、眞正なる道德的意識の論で、これにありては、主として、道德の動機、即主觀的道德原理と、道德の目的即客觀的道德原理とが論ぜられて居る。而て彼によれば、道德の目的は、世界の秩序を認め、これをば Absolut となし、これに合同することにある。而て彼れは又その研究法に於て、從來の獨逸哲學と異り、多少歸納的方法をば加味して、半哲學的、半科學的の態度によりて、倫理學をば研究し、幾分獨立の學として、これを取扱はんとして居るのが見られる。而してこの態度をば更に徹底しどこまでも科學的倫

理學の建設の必要といふことを主張したのは、かのギッチキである。

(2)ギッチキ(Gizycki, 1851-)

彼は、英國風の學者で、一種の幸福說をば主張した。而て彼れの著 Grundzüge der Moral (1883) は、全く哲學、宗教をはなれたる倫理學書として有名である。即ち彼れは一生、科學的倫理學といふことをば力說高調し、哲學に立脚せる獨逸在來の倫理學をば非常に攻擊したのである。此の如くにして獨逸に於て、倫理學をば、獨立の科學として論ずる傾向は次第に盛となつて來た。而てその中にあつて最も偉大なるものは、言ふまでもなくかのヴントである。

(3)ヴント(Wundt, 1832-)

彼の倫理學上の主著は Ethik (1886) である。彼れは、此の書に於て先づ凡て科學をば、說明的科學と、規範的科學とに大別し、而て、倫理學をば、規範的科學となして、これをば哲學よりして獨立せしめ、而して又その研究法に於ても、倫理學は單に思辨的方法のみにては不可である、こは如何にしても實驗的方法をも合せ用ひなければならぬ、と主張して居る。彼れの倫理學は大體に於て四部に分れて居る。即ち第一は、道德的生活の事實、第二は、道德的世界觀の發展、第三は道德の原理、第四は、道德的生活、即ち

道德的原理の實際的適用である。而てこれより見るも、彼れの倫理學研究の態度が、餘程從來のそれとは異つて居ることが分かるのである。次に又內容の方面より見るも、彼れは、因果律をば、物質的のものと精神的のものとに分ち、これによりて自由意志の問題をば說明せんとせるが如き、又道德的概念の起源につきても、彼れはその內面的要素と共に外面的要素卽社會的要素といふことをば重視し、道德的命令は、此等內外兩方面にその根源を有すとして、かの從來の先天說と經驗說とをば調和せんとせるが如き、又道德の標準といふことに就きても、餘程社會的要素をば重視し、道德の目的は人類全般の生活の向上發展にあり、となせるが、如きどこまでも倫理學をば科學として取扱はんとせる趣旨が窺はるるのである。然し彼れのこの科學的倫理學は、獨逸一般の學者間には、餘り容れらるることを得なかつた、が兎に角彼れの此の書は、輓近の獨逸倫理學書中に於て最も注目すべき書の一である。而て彼れに次で科學的立脚地に立てる倫理學者として注意すべきは、かのパウルゼン、である。

(4) パウルゼン(Paulsen, 1846-1908)

彼れの倫理學書は、卽ち System der Ethik (1889) で、これは『倫理學大系』として、我國にも飜譯せられて居る。彼れのこの書も、かのヴントの倫理學と同じく、科學的に倫理

問題をば論究せんと試みた者で、卽先づ最初は、道德的生活と、道德學の歷史とを述べ次に倫理學の哲學的及心理學的基礎を論じ、最後に德論及本務論につきて述べて居る。彼によれば、倫理學の目的は、第一に人生の目的、卽ち最高善をば規定し、次に是が實現の方法をば論究するといふ事にある。それ故に倫理學はどこまでも理論的科學にあらずして、實踐的科學であると云はなければならぬ。次に研究法に就きては、凡そ研究法には二種ある。一は卽ち合理的研究法で、他は經驗的研究法である。而て前者は主として數學の研究法で、倫理學は主として後者に依らなければならぬ。と主張して居る。而て最後に注意を値ひするのは、かのジムメルの倫理說である。

(5)ジムメル(Simmel, 1858-)

彼れには、Einleitung in die Moralwissenschaft (1891-93) なる著者がある。彼は從來の倫理學は、多くその概念が不明瞭なればこれをば豫め充分明かにして置かなければならぬ、となし、先づ倫理學上の諸概念の規定といふことに對して努力して居る。而て彼の倫理學は、かのシヂュキックのそれの如く、主として批判的のものであるが、然し建設的の處もないではない、彼によれば道德の目的は、人生最高の Tatsache をば實現するにある。卽あらゆる困難苦痛を忍びて、出來得るだけ深く且つ多方面に、人性を以、

活動せしむるにある、と說きて、かの佛國のギュヨー等に近き說をば述べて居る。尙ほ、彼れの外に、ニーチェの思想の如きも倫理學說上大に注意すべきものではあるが、こは最近のことに亘るを以てここには略することとする。

結論

上來吾人は英佛獨に於ける、十九世紀下半の倫理學說發達の大要をば、順次追つて、來たのであるが、今最後に、此等全體をば總括して、少しく、自らの感想を述べて見たいと思ふ。

先づ第一に、注意を要することは英佛獨の倫理學說がそれぞれ各自の特色をば、有して居る、といふことである。卽ち英國の倫理學は、かのホッブス以來、主として心理學に基づきて經驗的、歸納的、に研究せられ來つたので、卽ち經驗的心理的といふことがその特色である。而かもその心理說の不完全なるよりして、多くは快樂說、又は蘇國風の常識的直覺說に了らざるを得なかつたのである。而てこの經驗的倫理說に不滿足を感じ、獨逸哲學をばとり入るることによりて倫理學の心理學的基礎のみならず、その哲學的基礎をも確立せんとしたるかの英國新カント派の如きも、前述の如く、

決して獨逸思想の直輸入にはあらずしてどこまでもこれをば健實なる英國の學風に同化せしめんと努めたといふことは事實である。而して又かのスペンサーによりて大成せられし進化論的倫理學は、かのスティーブン、ハックスレーに至りて全く行詰り、今日にては、此の立脚地に立てる倫理學者は殆どないと言つてもよいが、然しさりとて進化論そのものに對する思想は、決して消滅せるにあらずして、こは廣く一般に普及し、これに對して、かのシヂュキック の如く冷淡の態度をとるものは、又殆ど無いと言つても可いのである。次に佛國に於ける倫理學說の特色は、一言にして、之を盡せば、社會的、といふことが出來ると思ふ。而して此の社會的方面の重視といふことは、主として、かのコムトの學說の影響に基けるものである。今翻つて此の佛國の倫理學說と英國のそれとの關係をば考ふるに、佛國は英國よりして、その心理學及進化論の思想をとり入れ、これによりて影響せられしこと大なりしに對し英國は佛國よりして、社會的要素の重視といふことをば學んで居る。次に獨逸の倫理學は前述の如く、從來主として哲學的のもののみなりしが、十九世紀後半に至りて、これをば經驗的に科學として打建てんとすることが、かのハルトマン、ギッチキ、等によりて試みられ、こはヴント、バウルゼン等によりて或る點まで全うせられた。而してこの倫理學の科

學的研究といふことは、英國倫理學の影響といふことが與つて力があると言つてもよい。然しこれと同時に英國は獨逸よりしてその理想主義の哲學をば輸入して、これによりて、自己の經驗的學風の短處を補はんとせしことは、前述の如くである。次に獨佛相互の關係を見るに、佛國にては、かのクザン、ジャネー、等の折衷派、及びルヌビエ等の新カント派ありて、餘程獨逸哲學の影響を受けておるが然しこれは、英國に於ける程深大ではない。而して獨逸の佛國より受けたる影響の著るしきものは殆ど無いと言つてもよい。第二に研究法につきて考ふるに、倫理學は、前述の如く、英、佛、獨、三國を通じて、思辨的、哲學的よりして、次第に、經驗的、批判的となり、又常識的倫理學よりして、漸次に歴史的倫理學の方に移行つて居る。而して之と共に倫理學說そのものも、餘程調和的となり、卽ち破壞的よりして建設的となつて來たのである。次に又從來、倫理は、多く不變的のもの、固定的のものと見られ來つたが、一般學術の進步、殊に生物學、社會學の發達と共に、道德の發展といふことが注意せられ、從つて、道德は次第に發生的に研究せらるる樣になつた。更らに又道德に對する見方に於ても、是迄は、道德、宗敎、藝術、政治、經濟等と、各自範圍を分ちて考察せられしが、近時に至り、此等をば、凡て人格活動の發現と見、あらゆる方面に亘りて道德的意味が認められ、從て道德の見

方が、從來よりも餘程擴大せられて來たのである。第三に、倫理學の內容、卽ち倫理學の問題につきて考ふるに、一方に於て、個人的道德といふことよりして、次第に社會的道德といふことに移り行き、他方に於て、從來の倫理學上の主要問題なりし、善惡の標準といふことは、次第に、人生の最高目的卽ち最高善は何ぞや、といふ問題に推移して行つたのである。此の如くにして、是迄動もすれば、哲學、宗敎、神學の一部として研究せられ勝ちなりし倫理學は次第に此等よりして分離し、而てこれと同時に、これをば、どこまでも、歷史的及び現實的の社會生活よりして研究し、眞の意味の科學的倫理學をば建設するといふ傾向が著るしく現はれて來たのである。然らば此等の傾向を、將來果して如何なる方向に、如何なる發達をなし行くであらうか。こは餘程重大なる問題で、ここに充分これをば詳論する暇を有しない。それ故に、こは暫く後日の機會に讓り、今は唯だ以上の如く、千八百五十年頃よりして千九百年頃に至る約半世紀間の、英佛獨の倫理學說發達の概要をば述ぶるに止めて置く次第である。（完）